

元良先生と坊や

若き父

一週間に亡くなられた元良先生の追想に耽りながら、本郷のアスファルト街を、美濃屋の前から四丁目の方に向つて歩いて居る時に、それからそれへと引續いて發展して去來する聯想の心像の變化を、其の推移の儘に任せて眺めながら、或る處まで來て、ふと次のやうな考が浮んで來た——「自分の考へと手とを働かせて、相應に苦心もし努力をもかけた物を、クリスマスへの贈物として、坊やに拵へて上げやう」。それは、時雨れてドンヨリした寒い十二月十九日、木曜日午後三時頃であつた。

此の思ひ付きが意識の水面に浮き出して來るに就ては、其由來も原因も、それ／＼相應にある事であらう。又浮き止るまでには、其水面下に於ける意識要素の經過なり離合なり發展なりも、それ相應に見出し得べき事であらう。若しかう云ふ心理的の聯想の關係を、維也納派の學者のするやうに、苦しいのを我慢して、無理やりに縫れた縫糸の小口を探し出し選り分けて、それからそれへと探索して行たならば、或は自分にも意外な感じのするやうな、いろいろ／＼な興味ある事柄が、たゞり寄せられて意識の水面に引上げられて來る事であらう。しかし今は、そんな面倒な事を深く考へ込んで居る餘裕がない。自分は本郷の片側町の寂しい歳末の光景を眺めながら、俯向き勝ちに急いで歩いて居るのである。

此の日は、いろいろ／＼な買物を彼方此方ですて來た爲めに、二重マントの隠しや袂や、左手に持た風呂敷包などが、次第／＼に膨張して且つ餘程込み合つて來た。風呂敷包が殊に大事さうに且つ持にくさうに、或は抱へられたり或は下げられたり、いろいろ／＼に其の持ち方が變化され調整され、換言すれば、自分がかなり是を持ちあつかつて居ると云ふ事は、寧ろ路を行く人の注意を惹くよりも、自分の興味を喚び起すに足りる丈けの材料が、此の風呂敷包の中に籠つて居る。

今日は、自分の教へて居る學校に教育史の試験が有つた。コメニウスの教授の法則と學校系統論」と言ふ問題を出して、其答案が風呂敷包の下敷と成つて、此のクニヤ／＼した下敷の上に、いろいろの品物が重り合つて混亂して包み込まれて居る。例へば文房堂で買つた繪具クリッシュの瓶と皿と刷毛、堀津で求めた練香、菊屋で取寄せた十二律の調子笛、池の端の坂毛登で取つた小倉山青木堂のキンク煎餅、袖珍本の伊蘇普物語と此の物語の繪本、坊や用の小さい靴下にカパーに手袋、瓦斯暖爐のゴム管などが各々其個性の自由なる表現を盡して、自分と坊やの官能と趣味とを有効に且つ豊富に刺戟するに足るべき形式に配到せられるやうに互に競争して居る。是を自分ばをしながら、コメニウスの地盤に乗せて、且つ無造作に黒い風呂敷に包んで四つに結んでしまつた。

此の風呂敷包を左手に抱へた時の觸覺と運動感覺から来る印象は恰も小さい黒猫を五六匹包んで抱へたやうな、ケニヤ／＼した不安な無氣味な運動の感じを與へて、自分は忽ち是を下げるやうに持ち直す。然るにコメニウスの立場が少し軟か過ぎる爲に、其上に混亂して重り合つて居る色彩、調音、芳香・甘味・溫暖と云ふ様な官能的の材料の容積と重量との均り合を、巧みに調整する事がどうしても困難になる。従つて下げた時の印象もやはり内容の重さの平均が取れない、極めて不安定なものとなつて来る。

俯向いてアスファルトを視凝めて歩いて居るうちに、元良先生と坊やとはすぐに連絡された。長方形の堅い鼠色の定規に、赤いムチムチした護謨縵を結び付けたやうな、茫漠とした浮動した心像が、アスファルトを背景として最初に現はれて来た。やがて其の心像の輪廓も色彩も次第に明かに發展し、運動も音聲も追々鮮がに分化して、定規と護謨縵とは、更にもつと具體的な心像と成つて固定し、背景も判然と見えて来た。斯して脱俗した枯淡なる哲學者と、若い軟かい肉のみなきつた嬰兒とは、最も鮮かなる記憶の心像と成つて、自分の經驗に登つて来た。實に先生と坊やは、次に逃べるやうな唯一つの場合に於て、最も明確に結び付けられたのであつた。

明治四十四年の五月、即ち、坊やが満一歳半の時であつた。乳母車に坊やを載せて、それを母さんと叔母やんとて押ししながら、大學で催された講演を皆まで聴きに行つた事があつた。此日先生は「初等生物の心」と言ふ講演をされた。晩方に成つて御話が濟んでから、歸り支度をしながら、喫茶所に小なる一家族が勢揃ひを

した。坊やは母さんに抱かれて居た。そしてお湯を吞まうとして、手を机の上の茶碗に延ばしかけた時に、黒外套を着て茶色の中折帽を左の手に持つた元良先生がスーツと入つて來られた。今迄屢々御見掛けはしたけれども、——御見掛けしたのみではない、四十年の七月初旬であつた、自分達が東片町に引越をした日に、市會議事堂で低能兒教育用の練心器の説明をされる時の助手を自分に頼む爲に、先生は御自分で尋れて來られた事が有つた、芝園と言はず座敷と言はず、引越しの道具で一杯に取散らしてあつたので、自分ほどぎまぎしながらまあどうぞ………」と言つた切りで見事に立往生をしてしまつた。此時、自分の暗示を期待しつゝあつた主婦は、障子の蔭で久しい間出やうか出まいかやはりまごまごして居て、とう／＼機會を失つて出ずにしまつた事があつた。其後、やはり正面から母子共に一度も御挨拶をする折がなかつた。

今此の喫茶所の場面を構成して居る各要素を通過して、先生は忽ちに相互の關係を直觀された。しかも、坊やの衝動的な意志行為が、オプー(お湯)に向つて活動し始めたと言ふ事を少しも御存知なくして、やがて坊やを抱き上げられた。先生は温かくこもつた笑ひ聲を、軽く連續的に發せられて、子供の感覺的興味を引くに足るやうな、いろ／＼の掛け聲や呼び聲を工夫されながら、尙抱いた坊やを差し上げたり抱き降したりして、坊やの身體に遲緩なる上下の運動を與へた。此の半年前に九州で御生れに成つた初孫に當られるお嬢さんを、先生は未だ御覽に成らない時であつた、自分は室の一隅に立つて、慈愛に充ちた祖父としての先生の面影を象徴しながら、交々湧出して來る感謝と羞恥と喜悅と心配と

を以て、此の興味ある對照が如何に發展して行くかを、あやぶみ乍ら窺かに觀察し始めた。

衝動行爲を妨げられた爲めに、坊やは「オプー」／＼「イヤイ」／＼「オプー」と呼びながら、差上げられたなりで無規律に且つ力任せに其の手足を彈力的に動かして始めた。そして此の感謝すべき光榮ある妨害から免れる爲めに、多くの運動の中から彼の選んだ最も有効のものは、兩手を間断なく動かして先生を押し除ける事であつた。坊やの身體が上と下に動くにつれて、先生の身體もそれ／＼異つた部分に於て、坊やの小さい手の突撃を受けなければならぬ筈である。最初の突撃は先生の眼鏡をかすめて左の顛頭へそれた。第二のお突きは先生の鼻を擱んで右の頬を、第三は先生の咽喉を攻撃して、何れも確かに手筈が有つたらしい。足は足で更らに獨立の運動を起して、先生の胸のあたりを蹴やうともかく、——驚き周章して六つの手は、飛行機隊のやうに閃めきながら一齊に此の小さい魔物に飛び付いて、危難に陥つて居られる先生を救ひ參らせて、扱て互々に相顧みて、少し経つてから、倒れるばかりにとつと笑ひ崩れたのであつた。

悠々として暮れて行く晩春の薄光は、鎖した窓の摩り硝子の爲めに更らに強き朧ろにされた。暗い室内に小さい／＼微粒のやうな光が縦横に飛散してそれが次第に濃く明るく成つて、先生と坊やの圍りを包んで居るかのやう、——聖者のやうに瘦せた頬に大きい深い皺を寄せて微笑しながら、所在を失つた兩手を軽く外套の隠しに入れて、少し俯き氣味に立たれた先生の姿は、横顔だけほの白く夕闇に浮き出して見えた。

純にして聖なる先生の面影は、此の時以來大理石像のやうに、

強く鮮かに自分の記憶に彫り付けられて、先生の代表的の姿と成つた。

この不可思議な對面を御縁にして、家族打揃つて是非御伺ひしやうと話し合つて居るうちに、坊やは慢性の腸の病氣にかいつて、日に／＼機嫌が悪くなつた。八月の末に代々木へ越してから、つい御伺ひする折も遠ざかつて、其の翌年春頃から先生の御病氣がきざしたのであつた。先生と坊はかゝる場面を以つて、唯一度連絡されたのみであつた。

求めても獲る事出来ない此の珍しい又貴い五月六日の夕べの光榮の全體の經過を、最も鮮かに展開させながら、殊に取り分けて興味なる場面に最も長く自分の注意を低徊させながら、かくして徳望一世の學界に高かつた先生と坊やとの間に結ばれた不思議な因縁の繪巻物は、自分がアスファルトに眼を注いだ時は全體の形は大きく表はれ、遠くを見渡した時には小さく縮少され、冥目した時には全體の光景が暗くなり、空を見上げた時には明るく變つて来る。そして暖かい血液と逼るやなう呼吸とが結晶して出來た知遇、光榮、面目、感謝、感恩……と言ふやうな考へがひとり／＼に先生の葬儀の日の一々の光景と眼まぐるしい程に急速に對照されて、この光景は考への走り方に支配され引づられて、それからそれへと發展してつながつて行く。

文房具店の前まで來ると、例によつて自分の眼は、たつた一人店番をして座つて居る此屋の老主人の、氣むづかしげな神經衰弱的な顔を視なければならぬやうに、其の方に引き付けられた。

本郷を歩く時にいつも氣に成つて仕方が無いのは、此の老主人の顔、殊に其の怒つたやうな眼付きと顔色とである。此眼が何故に氣になるか、どうして自分に一種の不安な感じを起させるか、久しい間自分には分らなかつた。もう一步立ち入つて言へば、事が自分の小さい時の思ふやうにならない、不快な經驗に關して居るらしい氣がする爲めに、寧ろ強いて分からせやうとしたくなかつたのであらう。此の眼は自分の最も敬慕した人の最も缺點とする所、即ち氣短かな、あの人に特有な怒つた時の（怒る時は相手が子供でも眞剣に怒つた）眼の表情を、そつくり寸分違はずに表はして居るからであらう。自分をこんな可愛がつて下さる人から、怒る時のこの眼付丈けを取り去つたらと小さい乍らもいづもさう思つて、しみんとひとり悲しかつた。自分は今でも此の眼を見れば、やはり子供の時の悲しい不快な感じがまざると浮いて強く追つて来る、何とも言へない一種の壓迫と抑制とを感ずる。

此の老人の眼の印象によつて、今迄の元良先生に關する綺麗な繪姿が悉く掻き消されて、全體の調子が何となく曇つて陰鬱に成つて來た。若し此の状態を持続すれば、眼の印象を基調として、抑壓された不快な音階を作り上げて、意識の旋律を發展させて行く事になるから、此の後引き續いて織りなされて經過して行く心像にしても聯想にしても、決して快いものである事は出來ぬ。此の場合に於て自分は、新しい刺戟によつて新しい場面を開拓し、全く別様な意識の世界を導いて來なければならなかつた。扱て取り敢へず此の道路を横切り、掘りならした處へ敷いた藁を踏んで、やがて木片をつめ込んだ車道に登つた。

赤門の前を歩いて居るうちに、體中かたかく成つて著しく疲勞を感じて來ると共に、例によつて淡い假睡の状態がそろ／＼始まつて來た。睡眠のすぐ前とか、椅子や壁にもなれた時、机に倚りかゝつた場合は勿論として、或は車の上、電車の中、劇場の席、講演の會場、對談の時、甚たしい時は歩行の途上に於ても、――働き過ぎた時、勞れた時、睡眠不足の時、知力を使ひ過ぎた時などに、いつも此の假睡が起る。

假睡の帝國は、覺醒の意識と睡眠の世界の間に位して、點線を以てゆる／＼圍まれた廣茫たる砂漠である。假睡は混沌界の如くに現はれて、それから夢の世界が發展して行く事もある、現實の醒めたる世界に立ち得る事もある。假醒に於ては覺醒と夢幻とが重なり、現在と過去とが融合し、聯想の法則の鎖を切斷されて遊離した心像は、電光の如く速かに來往し、覺醒の時よりも鮮かにさながら幻覺の如くに活躍する。そして視覺型の自分ですらも、此の世界に入れば音の心像も極めて明確に聞えるのみならず、運動の心像も非常に鮮かに感ぜられる。軽い廣い延び／＼した、自由自在に飛び廻る事の出来る天地である。

しかし自分を引付ける假睡の魔力と權威とは、決して單に是のみではない。自然に開展するに任せて、いつも現はれて來る自分に親しい假睡の世界は、子供のやうな心になつて子供の時代をあり／＼と見る事である。美しい豊富な視覺の心像を以て、古いなつかしい昔の夢が、再び繪のやうに浮び出して來る事である。

子供の遊戯を観察すれば、誰も居ない所にたゞ一人でしきりに應對をして御話をして居る事が珍らしくない。所謂「想像上の御友達」が明瞭なる視覺の心像と成つて、活人畫のやうに現はれて

來たのを自分の向側に投出して、それとまじごとをしたり會話をしたりするのである。然るに齡と共に此の暇のかゝる視覚の心像は追々消滅し、之に代つて働らきの早い聴覚や言語や運動の心像が發達して來て、主として思想を運用する役目を、急速に手取り早く果たす爲めに用ゐられ、かくして寂しい抽象的な意識の世界が出来上がつて來る。此の時に當つて、希臘の哲人の説いたやうな高遠なる愛を以つて、遠いあこがれの國を現世に呼び返へすものは、わが假睡の世界である。

假睡の過程は、發展すれば夢とも成り得るもので、要するに睡眠前の現象である。それ故自分一人の場合はいよとして、公けの場處に於ては、この假睡の美に惑溺して居るうちに、何時の間にか眞物の睡眠又は座睡に陥る危険を免かれ難い。若し假睡を假睡の儘として、遊離し浮動し去就し來住する心像の自然的開發に任せるならば、決して自分は其の睡眠の推移を防ぐ事は出来ぬ。若し又睡眠から防がうとする意志の努力が明瞭に發現すれば、其時すぐに美しい自由な聯想のベールが除かれて、むくつきき覺醒の意識が現はれて來る。自分は高低の場合に於ても自然に等一の方法を採りて、假睡の心像を極度まで發展せしめる。

ある夏大學の青山内科の醫局に居る友人が訪れて來て、友人は醫學上の話を始めた。二人で丸机に向つて腰をかけた。自分はグラ／＼椅子により掛かつて其話を聽いて居た。此の青年醫學士の話はいつもの通りの調子の低い、だるい、少しも感興の乘らない話振りなので、自分はウン、ウン、ウン、と返事をしながら

ら聞いて居るうちに、間もなく假睡の状態に陥つた。そして何時となしに友人の物語る聲が假睡の中に表はれて來る人物の話し聲と置き換へられて、やがて自分は其假睡心像中の人物と會話を始めた。つまり感覺的刺戟の強さは心像の強さに壓倒されてしまひ、友の話し聲は全く自分の意識から脱落して、心像としての會話は明瞭に且強烈になつて來た。そして友人の話が一向振はないと反對に、心像中の話がだんだんはずんで來て、これと應答して居る自分は、つい實際に「さうださうださうしやう」と現實の大きな聲で返事をしてしまつた。勿論其返事は、友人の話には全く通用の出來ない、極言すれば胡覺化しの利かないものであつた。

自分の假睡に就いては猶記すべき事が非常に澤山ある。しかし最も貴き紀念として、今でも鮮かに記憶に残つて居るのは、元良先生に親しく呼び醒まされた時の光景である。それは、前に述べたやうに、自分が助手をして、市會議事堂で先生が練心器の御話をされた時の事である。御話がすんでから、自分は講事堂の後の横の方の席に腰を掛けて、伊澤先生の演説を聽いて居た。暑さと疲勞とで失神したやうに成つて、椅子にもたれて居るうちにいつの間にか假睡の状態に陥つた。フロツクコートを着て壇上に立つた肥大な老紳士の音吐がガンガン耳に残りながら、薄風色の新しい細長いすらりとした革手袋を中心とした場面が忽ち展開して、輕快な假睡の心像が活き／＼として現はれて來た。白い樺の木の疎らな林を越えた向ふの明るい野原で、其手袋が落ちて居る。それを捜す爲めに自分は、繪にある小川の流れるやうにうれ／＼と遠くの方から續いて居る小徑を辿つて、軽くする／＼と歩いて

居た。——あとの細部の光景は、今は殆んど記憶に残つて居ない、

——やがて何か大きい黒い重いものが右の肩に觸つて、ドーンといふ大きい音がして、自分の身體が重心を失つて横へ倒れかけた。假睡の心像が忽然と消えて、はつと我に歸つたら、呼吸も脈搏も止まるやうな意外な現實の場面が出現して、自分の眼——と言ふより寧ろ全身を、直角にぐいぐいと壓迫して居る。此の壓力をかなぐり捨ててやうに振り拂つて、よくよく見定めたら、元良先生は瘦せて見える御腰を殆んど直角に屈め、自分の肩に手をかけて、真面目な御顔に微笑を含んで低い聲で言つて居られるのであつた。先生が何度仰しやつて始めて其意味が自分に通じたかは、勿論今になるまで知る事が出来ない。兎にも角にも自分で始めて明瞭に意識した言語は次のやうな意味であつた。「なんなら貴方は先きへ御歸りに成つてはどうです、御疲れてせうから、え、御歸りなさい」。自分は慚愧と當惑と辯解と謝罪との前馳とでも言ふやうな、一種の混沌とした胸騒ぎがするのみで、固よりまだまとまつた考へも何も浮んで来る餘裕がない。併し妙に手や指を擦れるやうに振ばせたり、急しいまばたきをしたり、頭をオロ／＼動かしたり、口を無節度に開閉させたりするのは、要するにこの統一的中心の未だ出來上らない個々の考を一々型にして叮嚀に先生に御目にかけて居る譯であるから、この劇的な場面の一員である先生の扱は、どうしても次のやうに働いて來なければならなかつた。先生は懷中時計を出して一寸見られて、かぶせるやうに、「いろ／＼有り難う御座いました。夕方の會には貴方も御出にならでせう、私ももう少したつたら行きますから、其時にまた」と、低い声も優しい情けの籠つた聲で仰しやつた。

雜 錄

○フレーベル會總會

フレーベル會第十八回總會は四月二十日東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開かれました。午前九時半開會、會員一同君々代合唱の後中川會長の挨拶があり、會務報告を終り、吉田熊次氏の「兒童に關する觀念の變遷」と題する講話あり、そりより議事に移り、會則の（改正別項會告の通り）と保嬰養成につき當局へ建議の件（追て御報告致します）とに就て協議し、一同別席に於て食事の後、午後一時より再び開會、横山榮次氏の「教育系統上幼稚園の占むべき地位」と題する講話あり、又會員中よりは野口學習院女學部幼稚園主事、後藤双葉幼稚園主任、及び矢太郎三島幼稚園長の談話あり、席を更めて茶菓の間に懇談し、或は陳列品を參觀し、夕刻に近く散會いたしました。尙ほ當日の講演及談話は次號の誌上に其の筆記を御紹介する筈であります。當日の陳列品中主なるものには神戸幼稚園の『色丸排へ具』、『色札排へ具』、『數へ方遊び』、『糸巻遊び』等の新案保育具大阪江戸掘幼稚園の『自然物利用の雛人形』、『系統取り遊び』、『小砂箱』模形及寫眞、『自然物利用手技』いろ／＼。同汎愛幼稚園の『秤遊び具』（以上は關西みやげとして倉橋幹事の乞ひ受け歸りしもの）、青森幼稚園の雪中保育の寫眞。學習院幼稚園の幼兒製作品『型にて描きし圖畫』。東京手技研究會の手技新案數種。池田とよ子氏新案『型紙』。東京女子高等師範學校附屬幼稚園幼兒製作品數種。東京フレーベル會出品『モンテッソリ式教育具』及び新玩具等がありました。